

アスリートに学ぶビジネス成功への軌跡(第24回)

女子バレーの名セッター、竹下佳江の新たな挑戦

2020.06.18



日本中が待ちわびた歓喜の瞬間は、2012年8月11日に訪れた。

ロンドン五輪のバレーボール競技、韓国を対戦相手に行われた女子3位決定戦は、日本が2セットを連取し、第3セットもポイント24対21でリードしていた。ロサンゼルス五輪以来28年ぶりのメダル獲得まであと1ポイントだ。

韓国選手がサーブを放つ。日本のレシーブ(最近は「レセプション」という用語を使うことも多い)が乱れ、ボールはコート右サイドの真ん中付近へ。ネット際からそのボールを猛然と追ったのが全日本の司令塔(セッター)、竹下佳江さんだった。

竹下さんは体勢を崩しながらも懸命にアンダーハンドでトスを上げた。そのボールをレフト(コートの左側、エースポジション)から迫田さおり選手が決め、日本代表は銅メダルを獲得した。

世界最小・最強セッターとして

あるテレビ番組で、竹下さんはメダル獲得を決めた最後のトスを「あれはけっこういいトスだったと思います」と、笑顔で振り返っていた。

一般的に、アンダーハンドで上げられたトスは、ボールに勢いがあり、またボールがかなり回転するためアタッカーは打ちにくいとされる。竹下さんはこの時、無理な体勢にもかかわらず、腕でボールの勢いを殺し、なるべく回転ないようにコントロールし、そのボールをコート反対側にいる迫田選手が打ちやすい位置にピンポイントで送り出していたのだ。

竹下さんというと、ジャンプし、空中で体をエビのように反らし、オーバーハンドでライト側の選手に速いトスを送る華麗なプレーが印象的だが、一見するとボールをつないだようにしか見えないプレーが絶妙なトスだったという事実。「世界最小・最強セッター」と評された彼女のすごみが感じられる。

2020年春、球団副社長に就任… 続きを読む